

# 便りのないのは良い便り？ 年の瀬に知る友の訃報…

加藤良一

令和4年(2022)12月10日

コロナ禍がすこし癒えつつある師走に

近ごろ年賀状を書かないという人が増えているようだ。

「虚礼廃止」とばかりに年賀状を書かないと主張する方は昔からいる。年賀状が虚礼かどうか知らないが、世の中「虚礼」かなと思うものを挙げたらきりが無い。

虚礼派は、<sup>あまた</sup>数多ある虚礼をすべてきっぱり拒否しているのか聞いてみたい気もするし、書くのが億劫だというのもわかる気もする。義務感や習慣で書くのであればなおさら面倒だろうし、それこそまさに虚礼となってしまう。

そもそも年賀状とはなんなのか。なんのために書くのか。どこが虚礼なのか。

商売上の必要があって年賀状を出すのはとりあえず別として、年が明け、気持ち新たに新春の挨拶を知人友人と交わす、このこと自体を虚礼と思う人はまずいまい。それを書状にして書く段になると一転して虚礼となってしまうのだろうか。

日本で、年賀状をいつごろからやりとりし始めたか明確ではないらしい。どうも奈良時代あたりに新年の年始回りという行事があったらしい。さらに平安時代には貴族や公家にもそれが広まり、遠方の人への年始回りに代

えて文書による年始の挨拶が行われるようになったという。その後、武家社会で年始の挨拶状が一般化し、それが庶民のあいだにも波及、ついには飛脚などを使って挨拶状が運ばれるようになったという。

欧米では、クリスマスカードでクリスマスと新年の挨拶を同時に済ませてしまう。年始に届けるわけではないがこれもある意味で年賀状とみてよいのではないか。このカードを虚礼とみる欧米人は果たしているのだろうか。

今では、紙の年賀状ハガキの他にもネット上でやりとりできるツールもたくさんあるから、書く行為の敷居は低くなっているにちがいない。

もっとも本当の虚礼派はそれでも書かないというにちがいない。なかには、年を取ってもう書くことができない、今年で終わりにするとわざわざ断ってくる律儀な方もいる。いっぽうで、喪中ではあるが年賀状は受け付けると加えてくる方もいる。世の中さまざまだ。

わたしは喪中以外の年は最小限の年賀状を書いている。ちょっと離れた友人や知人は一年に一度のやりとりでもなければ、知らないうちに亡くなっていたりする。

便りがないのは元気なしるしではなかったことを知る年の瀬となった。



[「雑感」トップへ](#)



[「Home Page」へ](#)